

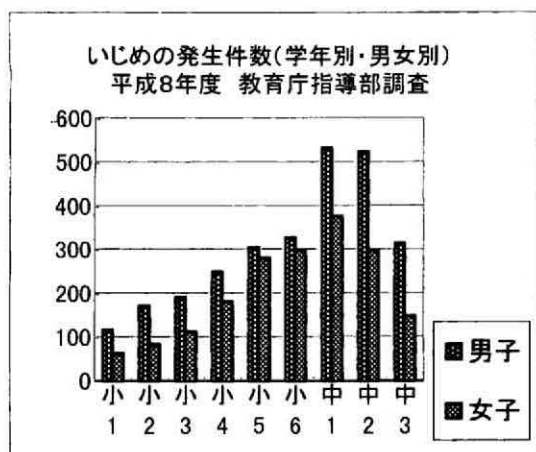
資料 いじめ問題に関する意識調査の分析結果等

図1	いじめの発生件数	112
図2	いじめの認知率（幼稚園）	112
図3	いじめの認知率（小・中学校）	113
図4	いじめの態様（幼稚園）	113
図5	いじめに対する子どもの考え方	113
図6	同一学年内における考え方の変化	114
図7	同一集団の学年進行による考え方の変化	114
図8	いじめに対する子どもの対応（幼稚園）	115
図9-1	いじめに対する子どもの対応（小・中）	
	－いじめられた子どもの対応－	115
図9-2	いじめに対する子どもの対応（小・中）	
	－周囲の子どもの対応－	115
○	いじめ問題意識調査学年段階別集計表(小学校)	117
○	いじめ問題意識調査学年段階別集計表(中学校)	118
○	意識調査用紙（中学校）	119

資料編 いじめ問題に関する意識調査の分析結果

本集計結果は、幼稚園に関しては、平成7年6月に幼児教育研究部が4歳児、5歳児の計241名に対して、担任による聴き取り調査を実施した結果である。また、小・中学校に関しては、平成7年6月、平成8年6月、平成9年6月の3回にわたって実施した質問紙調査の結果である（ただし、小1、小2については、平成8年6月の結果である）。なお、図1のみ教育庁指導部の調査による。

図1 いじめの発生件数



- 小学生期の発生件数は学年が上がるにつれて増加している

発生件数は学年を追って増加しており、小学校6学年が最も多く発生している。

また、男女別にみると、5学年・6学年だけは女子の発生件数が多くなり、男女の件数の差が少なくなっている。

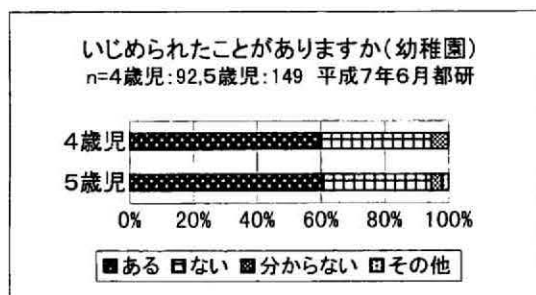
- 中学生期では、1学年がピークであり、3学年で大幅に減少する

発生件数は、1学年が小・中学校を通じて最も多く、2学年、3学年の順に減少する。特に、3学年では大幅に減少する。男女別では、どの学年も男子のほうが件数が多い。

※ 幼児期の発生件数に関する調査は、教育庁指導部においては行っていない。また、本研究においても都全体を対象とした調査は行っていないため、全体的な発生件数は把握できない。

※ 「認知率」とは、本研究において実施した質問紙調査において、「いじめがあった」と回答した者の割合を示す。

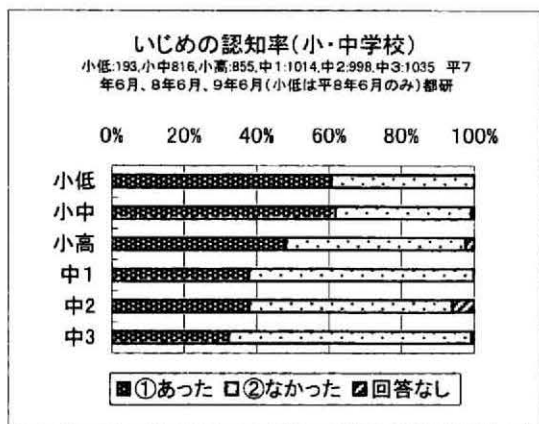
図2 いじめの認知率(幼稚園)



- 幼稚園では、約6割が「いじめられたことがある」と答えている

担任による聴き取り調査の結果では、「いじめられたことがあるか」という質問に対して、4歳児、5歳児とも約60%の幼児が「ある」と回答している。

図3 いじめの認知率（小・中学校）



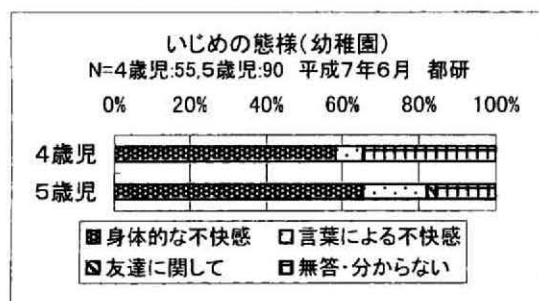
○ 小学校では、高学年になると認知率は低下する

小学校低学年と中学年については、いじめが「あった」と回答した者が約60%と高い割合を占めているが、高学年になると10ポイント以上減少する。

○ 中学校では、認知率は小学校高学年より10ポイント以上低下する

中学校になると1学年、2学年で38%、3学年で33%と、小学校高学年と比較しても10ポイント以上認知率が低下する傾向がみられる。

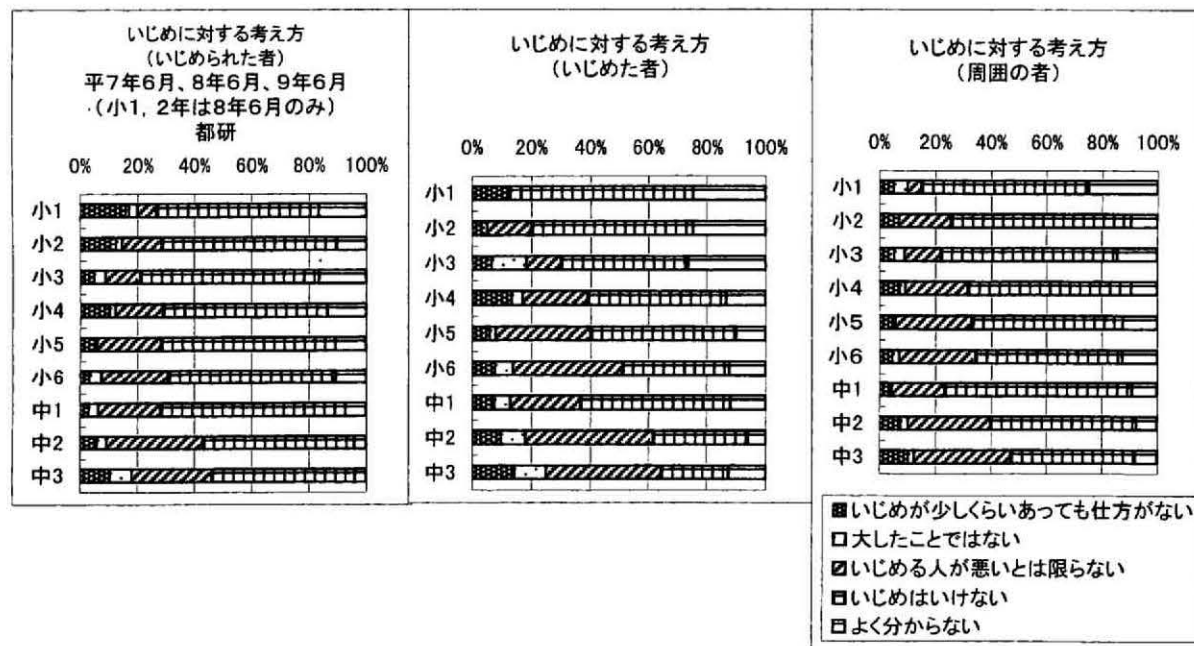
図4 いじめの態様（幼稚園）



○ 幼稚園では、身体的な不快感をいじめととらえることから始まり、発達とともに言葉によるいじめが増加する

4歳児、5歳児とも「ぶたれた」などの身体的な不快感が60%前後で最も多く、「悪口を言われた」などの言葉による不快感は、年齢の進行とともに増加する。

図5 いじめに対する子どもの考え方



○ 幼児では、相手の理不尽な行為をいじめととらえる傾向が見られる

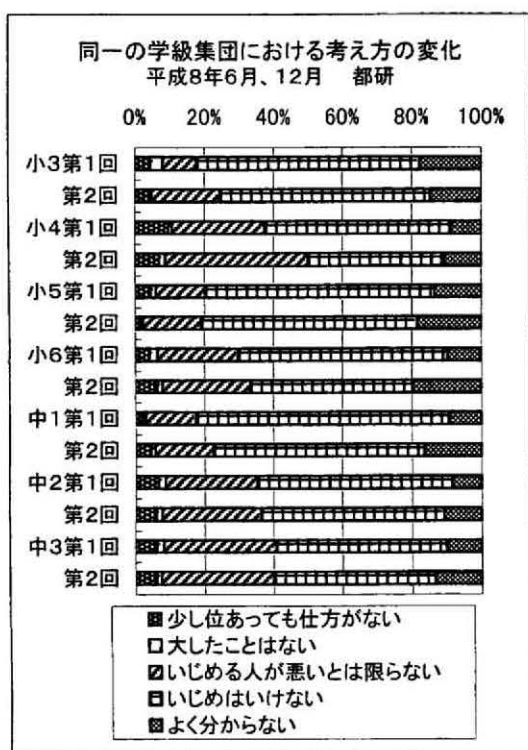
本研究においていじめられた経験があると答えた幼児に「どうしていじめられたのか」を問うたところ、「自分は何もしていないのに」という回答が、4歳児22%、5歳児27%あり、い

じめられる幼児の行為との関係の中でいじめる幼児の理不尽な行為をいじめととらえていることが分かった。

○ 小・中学校ではいじめにかかわる立場の違いにより、いじめに対する考え方が違う

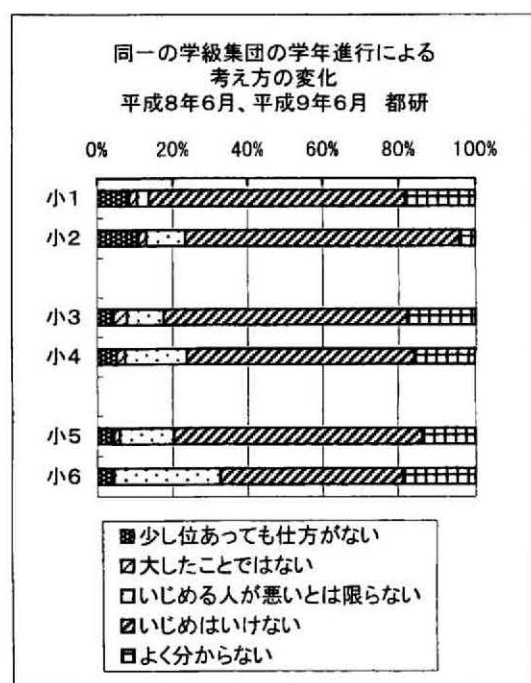
いじめにかかわる立場を、いじめ、いじめられ、いじめを見たことがある（周囲）の児童・生徒の三者に分けて学年別に考え方を集計した結果、どの立場でも、「どんな理由があってもいじめはいけない」とする回答が最も多いが、学年を追うごとに減少し、「場合によっては、いじめる人が悪いとは限らない」とする回答が増加する傾向が見られた。各立場の中でいじめられた児童・生徒といじめを見た（周囲にいる）児童・生徒の回答傾向は似ているが、いじめた児童・生徒の場合には、「いじめる人が悪いとは限らない」「ふざけ半分でやっているのだから、大したことではない」「いろいろな人がいるのだから、いじめが少しくらいあっても仕方がない」という回答が他の立場に比べて相対的に高かった。

図6 同一学年内における考え方の変化



n=小3: 第1回113,第2回102,小4: 第1回94,第2回107,小5: 第1回133,第2回130,小6: 第1回124,第2回126,中1: 第1回300,第2回597,中2: 第1回334,第2回333,中3: 第1回290,第2回277

図7 同一集団の学年進行による考え方の変化



n=小1:94,小2:99,小3:113,小4:135,小5:133,小6:135
小1、小2は参考図。

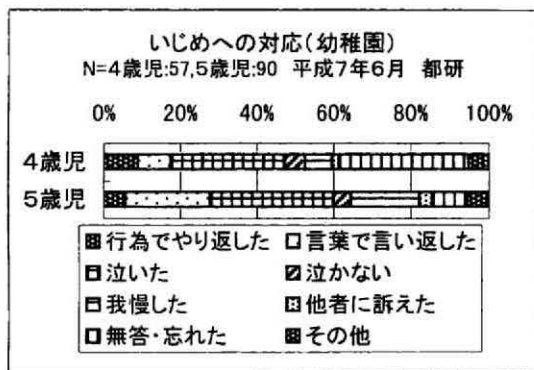
○ 同一の学級集団において、時間的経過に伴い、いじめはいけないとする児童・生徒が減少する傾向が現れる

平成8年の6月と12月で同一の調査を行った結果、半年の時間的な経過の中で、「どんな理由があってもいじめはいけない」とする回答がどの学年でも減少していた。

○ 同一集団が継続する学年では、2年目には「いじめる人が悪いとは限らない」という者が増加する

5学年から6学年など、同一集団が継続する学年において「いじめはいけない」とする者が減少し、「いじめの人が悪いとは限らない」とする回答が増加するという傾向がみられ、しかも学年段階が上がるにつれて同様の傾向があることが分かった。小・中学校において学級の編成替えや入学などにより新しい人間関係を形成する集団内では、いじめ行為の背景がまだ見えないことから、「いじめはいけない」とする回答が多く見られる。

図8 いじめに対する子どもの対応（幼稚園）



○ 5歳児では、自力で問題解決をしたいとする心理の芽生えが見られる

いじめられた後の対応では、「言葉で言い返した」が4歳児では9%だが、5歳児では22%に増加する。

図9-1 いじめに対する子どもの対応（小・中）

——いじめられた子どもの対応——

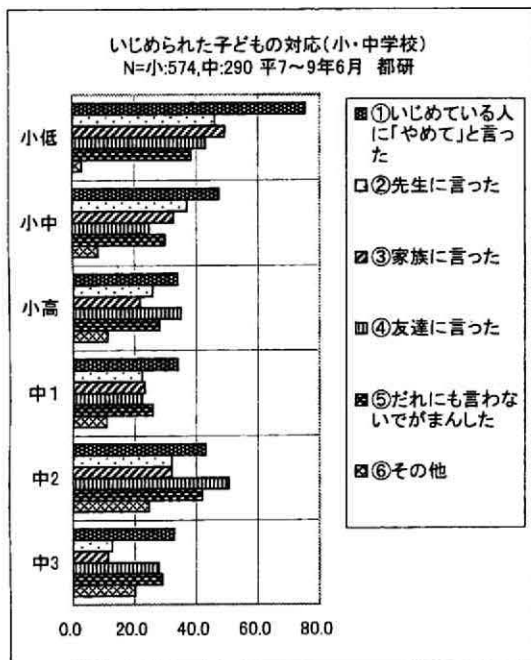
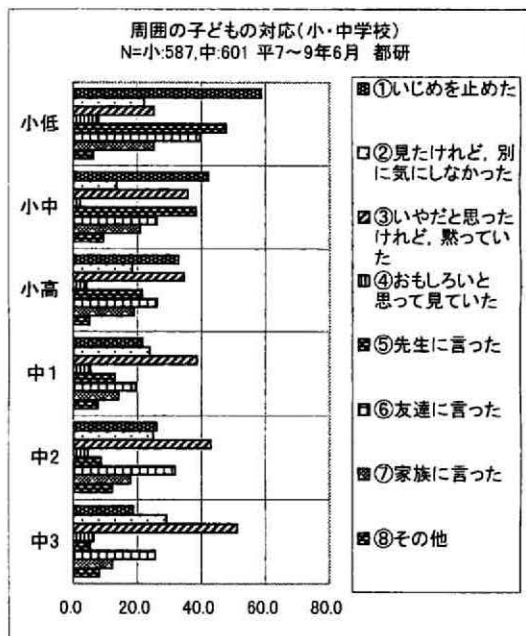


図9-2 いじめに対する子どもの対応（小・中）

——周囲の子どもの対応——



○ 小学校低学年では、学年が上がるにつれて止めたり、訴えたりする児童が減少する低学年では、「やめて」と言える者が75%を占め、教師や家族などに訴える場合も、小・中学校を通じて最も多くなる傾向がある。また、いじめを見たとき「止めた」者が多く、この段階ではいじめの周囲にいる児童も、仲介に入ることが比較的容易であること

を示している。中学年でいじめられた児童の対応は「やめて」と言える者が低学年に比べて28ポイントも減少している。

また、いじめを見た者についても「止めた」や「訴えた」児童が減少し、「黙っていた」児童が低学年に比べて10ポイント以上増加する。

高学年でいじめられた児童の対応は、「やめて」と言った者は低・中学年と比べてかなり低い割合となっている。また、訴える相手は高学年では「友達」が教師や家族よりも高い割合となる。さらに、いじめを見たときの対応として「いやだと思ったが、黙っていた」という回答が最も多くなっている。

また、「別に気にしなかった」という傍観者的な態度をとる者の割合が低・中学年に比べて高くなっている。

- 中学校ではいじめられた生徒が周囲の大人に訴える割合が一層低下する
周囲にいる生徒にも、傍観する態度が一層目立つようになる。教師に言った者は、13%、8%、5%と学年を追って減少している。
特に、3学年ではいじめを見た者の半数以上が「いやだと思ったが黙って見ていた」と回答している。

第1回～第3回いじめ問題意識調査学年段階別集計表（小学校）

	小学校低学年		小学校中学年		小学校高学年		小学校全体	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	合計	比率
	193	(%)	822	(%)	876	(%)	1891	(%)
質問1 あなたの学校は、楽しいですか。（単数選択）								
①とても楽しい	100	51.8	297	36.1	341	38.9	738	39.0
②楽しい	46	23.8	273	33.2	309	35.3	628	33.2
③どちらとも言えない	21	10.9	151	18.4	140	16.0	312	16.5
④あまり楽しくない	14	7.6	68	8.3	51	5.8	133	7.0
⑤ぜんぜん楽しくない	10	5.2	6	0.7	23	2.6	31	1.6
回答なし	2	1.0	6	0.7	23	2.6	31	1.6
質問2 今年の4月から今までの間に、この学校でいじめがありましたか。（単数選択）								
①あった	117	60.6	508	61.8	422	48.2	1047	55.4
②なかった	76	39.4	308	37.5	433	49.4	817	43.2
回答なし	0	0.0	6	0.7	21	2.4	27	1.4
質問3 質問2で「あった」と答えた人に聞きます。それは、どんないじめでしたか。（複数選択）								
①しつこく悪口を言う	39	33.3	260	51.2	195	46.2	494	47.2
②仲間はづれにする	36	30.8	139	27.4	178	42.2	353	33.7
③無視する	32	27.4	117	23.0	145	34.4	294	28.1
④悪ふざけをする	27	23.1	109	21.5	89	21.1	225	21.5
⑤いたづらをする	26	22.2	91	17.9	79	18.7	196	18.7
⑥わざといやがることをする	39	33.3	184	36.2	127	30.1	350	33.4
⑦持ち物をかくす	37	31.6	103	20.3	65	15.4	205	19.6
⑧たたいたり蹴ったりする	68	58.1	270	53.1	139	32.9	477	45.6
⑨お金や物をとりあげる	12	10.3	22	4.3	15	3.6	49	4.7
⑩プロレスごっこなどといって、技をかける	14	12.0	54	10.6	29	6.9	97	9.3
⑪脅す	14	12.0	63	12.4	43	10.2	120	11.5
⑫着ているものを無理に脱がせたりする	7	6.0	23	4.5	13	3.1	43	4.1
⑬その他	5	4.3	48	9.4	46	10.9	99	9.5
質問4 質問2で「あった」と答えた人に聞きます。そのいじめの中であなたはどうしましたか。（複数選択）								
①いじめられた	65	55.6	321	63.2	188	44.5	574	54.8
②いじめた	28	23.9	139	27.4	113	26.8	280	26.7
③いじめているのを見た	63	53.8	287	56.5	237	56.2	587	56.1
④いじめがあったことは知っているが、見てはいない	32	27.4	164	32.3	125	29.6	321	30.7
質問5 質問4で「いじめられた」と答えた人に聞きます。いじめられたときどうしましたか。（複数選択）								
①いじめている人に「やめて」と言った	49	75.4	152	47.4	64	34.0	265	46.2
②先生に言った	30	46.2	119	37.1	49	26.1	198	34.5
③家族に言った	32	49.2	105	32.7	41	21.8	178	31.0
④友達に言った	28	43.1	80	24.9	66	35.1	174	30.3
⑤だれにも言わないでがまんした	25	38.5	96	29.9	53	28.2	174	30.3
⑥その他	2	3.1	26	8.1	21	11.2	49	8.5
質問6 質問4で「いじめているのを見た」と答えた人に聞きます。そのときどうしましたか。（複数選択）								
①いじめを止めた	37	58.7	121	42.2	78	32.9	236	40.2
②見たけれど、別に気にしなかった	14	22.2	39	13.6	44	18.6	97	16.5
③いやだと思ったけれど、黙っていた	16	25.4	103	35.9	82	34.6	201	34.2
④おもしろいと思って見ていた	5	7.9	6	2.1	10	4.2	21	3.6
⑤先生に言った	30	47.6	110	38.3	51	21.5	191	32.5
⑥友達に言った	25	39.7	75	26.1	62	26.2	162	27.6
⑦家族に言った	16	25.4	60	20.9	45	19.0	121	20.6
⑧その他	4	6.3	27	9.4	12	5.1	43	7.3
質問7 あなたはいじめについて、どう思いますか。（単数選択）								
①いろんな人がいるから、いじめが少しくらいあっても仕方がない	15	7.8	54	6.6	35	4.0	104	5.5
②ふざけ半分でやっているのだから、大したことではない	4	2.1	15	1.8	11	1.3	30	1.6
③場合によっては、いじめの人が悪いとは限らない	16	8.3	133	16.2	203	23.2	352	18.6
④どんな理由があっても、いじめはいけない	127	65.8	495	60.2	520	59.4	1142	60.4
⑤よく分からない	30	15.5	114	13.9	107	12.2	251	13.3
回答なし	1	0.5	11	1.3	0	0.0	12	0.6

※ 調査時期 低学年：平成8年6月、中学年及び高学年：平成7年6月、平成8年6月、平成9年6月

第1回～第3回いじめ問題意識調査学年別集計表（中学校）

	1年		2年		3年		中学校全体	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	合計	比率
	1015	(%)	1062	(%)	1042	(%)	3119	(%)
質問1 あなたの学校は、楽しいですか。(単数選択)								
①とても楽しい	422	41.6	285	26.8	229	22.0	936	30.0
②楽しい	398	39.2	418	39.4	411	39.4	1227	39.3
③どちらとも言えない	143	14.1	219	20.6	261	25.0	623	20.0
④あまり楽しくない	31	3.1	83	7.8	93	8.9	207	6.6
⑤ぜんぜん楽しくない	18	1.8	51	4.8	48	4.6	117	3.8
回答なし	3	0.3	6	0.6	0	0.0	9	0.3
質問2 今年の4月から今までの間に、この学校でいじめがありましたか。(単数選択)								
①あった	385	37.9	404	38.0	337	32.3	1126	36.1
②なかった	629	62.0	594	55.9	698	67.0	1921	61.6
回答なし	1	0.1	64	6.0	7	0.7	72	2.3
質問3 質問2で「あった」と答えた人に聞きます。それは、どんないじめでしたか。(複数選択)								
①しつこく悪口を言う	161	41.8	227	56.2	121	35.9	509	45.2
②仲間はずれにする	87	22.6	157	38.9	75	22.3	319	28.3
③無視する	67	17.4	168	41.6	82	24.3	317	28.2
④悪ふざけをする	97	25.2	119	29.5	71	21.1	287	25.5
⑤いたづらをする	72	18.7	105	26.0	74	22.0	251	22.3
⑥わざといやがることをする	125	32.5	149	36.9	98	29.1	372	33.0
⑦持ち物をかくす	51	13.2	89	22.0	60	17.8	200	17.8
⑧たたいたり蹴ったりする	141	36.6	128	31.7	114	33.8	383	34.0
⑨お金や物をとりあげる	8	2.1	14	3.5	18	5.3	40	3.6
⑩プロレスごっこなどといって、技をかける	28	7.3	73	18.1	33	9.8	134	11.9
⑪脅す	18	4.7	39	9.7	32	9.5	89	7.9
⑫着ているものを無理に脱がせたりする	13	3.4	16	4.0	7	2.1	36	3.2
⑬その他	35	9.1	35	8.7	25	7.4	95	8.4
質問4 質問2で「あった」と答えた人に聞きます。そのいじめの中であなたはどうしましたか。(複数選択)								
①いじめられた	111	28.8	100	24.8	79	23.4	290	25.8
②いじめた	93	24.2	76	18.8	59	17.5	228	20.2
③いじているのを見た	184	47.8	245	60.6	172	51.0	601	53.4
④いじめがあったことは知っているが、見てはいない	109	28.3	161	39.9	124	36.8	394	35.0
質問5 質問4で「いじめられた」と答えた人に聞きます。いじめられたときどうしましたか。(複数選択)								
①いじている人に「やめて」と言った	38	34.2	35	43.2	26	32.9	99	34.1
②先生に言った	25	22.5	26	32.1	10	12.7	61	21.0
③家族に言った	26	23.4	26	32.1	9	11.4	61	21.0
④友達に言った	25	22.5	41	50.6	22	27.8	88	30.3
⑤だれにも言わないでがまんした	29	26.1	34	42.0	23	29.1	86	29.7
⑥その他	12	10.8	20	24.7	16	20.3	48	16.6
質問6 質問4で「いじているのを見た」と答えた人に聞きます。そのときどうしました。(複数選択)								
①いじめを止めた	40	21.7	64	26.1	32	18.6	136	22.6
②見たけれど、別に気にしなかった	44	23.9	61	24.9	50	29.1	155	25.8
③いやだと思ったけれど、黙っていた	71	38.6	105	42.9	88	51.2	264	43.9
④おもしろいと思って見ていた	10	5.4	11	4.5	11	6.4	32	5.3
⑤先生に言った	24	13.0	21	8.6	9	5.2	54	9.0
⑥友達に言った	36	19.6	78	31.8	44	25.6	158	26.3
⑦家族に言った	26	14.1	44	18.0	21	12.2	91	15.1
⑧その他	14	7.6	30	12.2	14	8.1	58	9.7
質問7 あなたはいじめについて、どう思いますか。(単数選択)								
①いろんな人がいるから、いじめが少しくらいあっても仕方ない	22	2.2	60	5.6	75	7.4	157	5.0
②ふざけ半分でやっているのだから、大したことではない	12	1.2	19	1.8	22	2.1	53	1.7
③場合によっては、いじめる人が悪いとは限らない	188	18.5	278	26.2	327	31.4	793	25.4
④どんな理由があっても、いじめはいけない	672	66.2	594	55.9	506	48.6	1772	56.8
⑤よく分からない	109	10.7	94	8.9	101	9.7	304	9.7
回答なし	12	1.2	17	1.6	11	1.1	40	1.3

※ 調査時期 平成7年6月、平成8年6月、平成9年6月

意識調査（中学校）

*小学校はルビをつけた。 (男・女) 出席番号 _____ 番

次にたずねることについて、あてはまるものの番号に○をつけてください。

質問1. あなたの学校は、楽しいですか（一つだけ選んでください）。

- ① とても楽しい。
- ② 楽しい。
- ③ どちらとも言えない。
- ④ あまり楽しくない。
- ⑤ ぜんぜん楽しくない。

質問2. 今年の9月から今までの間に、この学校で「いじめ」がありましたか。

(どちらか一つを選んでください)

- ① あった。 ② なかった。

質問3. 質問2で「あった」と答えた人に聞きます。それはどんな「いじめ」でしたか

(いくつ選んでもかまいません)。

- ① しつこく悪口を言う。 ② 仲間はずれにする。 ③ 無視する。
- ④ 悪ふざけをする。 ⑤ いたづらをする。 ⑥ わざといやがることをする。
- ⑦ 持ち物をかくす。 ⑧ たたいたり蹴ったりする。 ⑨ お金や物をとりあげる。
- ⑩ プロレスごっこなどと言って、技をかける。 ⑪ 脅す。
- ⑫ 着ているものを無理にぬがせたりする。
- ⑬ その他 ()

質問4. 質問2で「①あった」と答えた人に聞きます。その「いじめ」の中で、あなたはど

うしましたか (いくつ選んでもかまいません)。

- ① いじめられた。
- ② いじめた。
- ③ いじめているのを見た。
- ④ いじめがあったことは知っているが、見てはいない。

質問5. 質問4で「①いじめられた」と答えた人に聞きます。いじめられたとき、どうしましたか (いくつ選んでもかまいません)。

- ① いじめている人に「やめて」と言った。 ② 先生に言った。
- ③ 家族に言った。 ④ 友達に言った。
- ⑤ だれにも言わないで、がまんした。
- ⑥ その他 ()

質問6. 質問4で「③いじめているのを見た」と答えた人に聞きます。

そのとき、あなたはどうしましたか (いくつ選んでもかまいません)。

- ① いじめを止めた。 ② 見たけれど、別に気にしなかった。
- ③ いやだなと思ったけど、黙っていた。 ④ おもしろいと思って見ていた。
- ⑤ 先生に言った。 ⑥ 友達に言った。 ⑦ 家族に言った。
- ⑧ その他 ()

質問7. あなたは「いじめ」についてどう思いますか (一つだけ選んでください)。

- ① いろんな人がいるから、いじめが少しぐらいあってもしかたがない。
- ② ふざけ半分でやっているのだから、たいしたことではない。
- ③ 場合によっては、いじめの人が悪いとは限らない。
- ④ どんな理由があっても「いじめ」はいけない。
- ⑤ よくわからない。

質問8. いじめや友達関係について、あなたが感じていることを自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

研究をふりかえって

平成7年から始めた「いじめ問題」の研究にピリオドを打つことになった。

本報告書においては、当初のねらいであった「学校における“いじめ”をどのように発見し、どのように解決するか」のノウハウを必ずしも十分に示し得なかったかもしれない。しかし、それはむしろ、形ばかりの実用書となることを避けた結果でもありと考えている。

と言うのも、この研究の過程で出会った数多くの事例や子どもたちとの面接調査を通じて、

- “いじめ”を予防する万能薬もなければ、個別のいじめを対症療法的に指導していけば、その学校に“いじめ”がなくなるというものでもない。

それにもかかわらず、私たちが、このいじめ問題に向き合わなければならないのは、

- いじめであれ、その他の問題行動と呼ばれるものであれ、それらは、〈現代の子どもたちの心性 (mentality)〉に深く根ざしているからなのだ、ということを教えられたが故であった。

このことをもう少し理解していただくために、本研究報告の背景にある〈考え方〉や十分に説明できなかった部分について、事例を通して説明し、補足しておくことにしたい。

(1) いじめ問題にどのように取り組んだのか？

幼稚園でA男は一人で遊んでいることが多い。仲良く遊んでいる幼児たちの集団に近付いて、仲間に入れてもらおうとしても、「ダメッ」と言って拒絶されてしまう。教師がA男に近寄ると、「僕、遊ぶ相手がいないの」と寂しげに訴えた。

これは、本報告書の24頁で取り上げている次のような事例の半年後の姿である。

幼稚園児のA男は、教室で皆が行儀よく並んでいる所へ来て、いきなり2、3人の幼児を唐突に突き飛ばしたり、また砂場で6、7人で遊んでいる幼児にそこで作っていた砂団子を投げたりした。こういうことがたびたび続くうちに、子どもたちが「A男にいじめられた」と訴えることが多くなった。…

“いじめ”とは「人間関係の^{ひず}歪み」現象である。上記の一連のケースの分析から、私たちは《いじめは、個別の事象ごとに断片化するのではなく、(集団内の)人間関係という大きな流れの中に位置付け、理解する必要があること》を教訓として導き出したのである。

およそ人と人との出会い、関係が結び結ばれる場においては、互いの欲求が交錯し、しばしば対立することが少なくない。そのとき、両者の関係は歪んだ形をとって表面化する。そのような歪みが、ある一定以上の振幅を示したとき、そこに現れる事象のあるものを我々は“いじめ”と呼んでいるのである。

それゆえ、学校という場においては、子ども同士の人間関係から生み出される“いじめ”が、「いつ、どこで生じても不思議はない」し、「一つのいじめ事象が消滅したとしても、いじめが解消されたとは限らない」のである。

だからと言って、^{あつれき}軋轢のない人間関係が理想の状態である訳でもないし、また、“いじめ”の原因を「子どもたちの〈人間関係づくりの未熟さ〉」のみに帰すべきでもない。「子どもとは未熟なものであり、大人は成熟したものである。」という固定観念・先入観でこの問題を捉えるべきではない。学校における“いじめ”は、大人社会にも共通に存在する“いじめ”と別種のものではないからである。

被害者学から加害者学へ 平成8年に発表した第一次の報告までは、あくまでも「いじめられる子ども(=被害者)の救済」「被害の予防」という観点を中心に研究を進めてきた。いわば“被害者学”的なアプローチとでも言おうか。しかし、この手法は“いじめ”を「〈いじめられる側=弱者〉対〈いじめられる側=弱者〉」「〈悪〉対〈善〉」という二項対立図式に還元してしまいやすい。

このような図式に従って“いじめ”指導を行うためには、「被害者=弱者」がいて、「不当な加害行為が存在すること」が前提になる。だが、先の〈A男のケースのその後の展開〉に当てはめて考えてみれば、〈仲間はずれ=排斥〉という現に目の前にあるいじめ事象を切り取って、「他の幼児=いじめられる側=弱者=善」「A男=いじめられる側=弱者=善」という図式で指導することは適切でないことが分かるだろう。“いじめ”の定義(4頁)の中でも触れている、「弱い立場に立たされる」ということは、「弱者である」ということとは違う。《「弱いものいじめ=人権侵害」という尺度だけで目の前にあるいじめ事象を捉え、指導することは、必ずしも、いじめの解消という目的にとって有効なものとはなり得ない》のである。

それゆえ、むしろ指導という観点に立つ限り、「なぜ、いじめなのか?」「なぜ、いじめられる側や周囲にいる子どもたちが、“いじめられる側だけが悪い訳ではない。いじめられる側にも問題がある”と言って、自分たちの行為や態度を正当化しようとするのか?」という分析が必要ではないかと考えたのである。つまり、いわば“加害者学”的な、〈いじめている側の子どもの心理と行動〉や〈いじめを引き起こしている心理メカニズム〉などの理解を踏まえたアプローチが必然的に要請されてくるのである。

(2) 子どもたちの心理と行動をどのように理解するか?

この春、中学校に入学したときから仲良しになり、いつも一緒だったクラスの仲間3人が、2学期になってから急に私を無視したり、陰口を言うようになりました。私が近付こうとすると、スーッと離れていってしまいます。こうした状態が1か月位続き、今は学校を休んでいます。お母さんに相談しても「あなたが強くなりなさい」と言うばかりだし、先生も「他にも友達はあるじゃないか」と言って、私の気持ちを分かってくれません。

一昨日お母さんが買い物に出た留守に、手首を切ったけれど、死ねませんでした。なんかもう、どうでもよくなってしまって、今日は、お母さんが使っている睡眠薬の残りを全部飲んじゃいました。

なぜ、この生徒は、そこまで思い詰める必要があったのだろうか?子どもたちの〈人間関係づくりの未熟さ〉という解釈を当てはめることの一定の妥当性は認めつつも、それだけでこの事例のような中学生や高校生の心理と行動を説明することには、無理が伴うように思われる。

そこで、仮説としてではあるが、新たな解釈の枠組みを3つ提示したい。

仲間集団の重み まず、その一つが、彼女にとっての「仲間集団の重み」ということなのであり、本報告書で、第一次的な人間関係の形成の場としての「小集団＝仲間集団」に着目しているのも、このような問題意識と関連している。確かに、親しい者との人間関係の中で自分の居場所を見つけようとする事自体は、子どもの成長過程において当然に経験すべきことであろう。そのような人間関係からスタートして、やがて社会に向かって次第に広く人間関係を求め、自己の存在を確認することにつながっていくのであろう。しかし、当然のことながら、現実には、子どもたち自身が、仲間との関係をそのような移行過程の一部として理解している訳ではない。

子どもたちが自発的に形成する集団＝「仲間」に着目すると、次のような特徴が見えてくる。

第一に、「仲間」は、多くの場合、いわゆる“ノリ”を中心とするつながりによってまとまっている。ノリとは一種の気分のようなものである。お互いの興味・関心を中心にして話題を共有できるということが、ノリの必要条件である。このようなノリを共有できる範囲の者が集団＝友人関係の範囲であり、共有できない者はいわば外部世界の者（よそ者、他者）として意識される。仲間の良好な人間関係を維持するためには、自分がいかにノリを壊さないか、ノリを作っているかが大切であると考えられている。

また一方で、ノリを壊さないというルールは、人間関係の中で自分が傷つけないための心理メカニズムとしても働いている。自分を守る＝傷つけないためには、反面で、他人が嫌がるかもしれない領域には意識的に踏み込まないという自制が必要なのである。自分の心配事を「仲間＝友人（場合によっては、親や教師も含まれる。）」に語ることは、煩わしい課題を相手に押しつけることになるという理由で、回避することが望ましいと意識している子どもも少なくない。

第二に、仲間は、相互承認の機能を果たしているということである。音楽であれ、スポーツであれ、ファミコンであれ、ファッションであれ、興味・関心を共有する限りにおいて集団内に自分の居場所が確保される。そして、興味・関心を共有する仲間だという相互承認のメッセージとして、様々な同調行動が生まれる。だが、それは、時として、過剰な同調圧力となって逆流し、彼ら自身を拘束することにもつながってくるのである。

第三には、その裏返しとしての、仲間以外の世界に対する関心の希薄さである。「他者＝外部世界の者」がどのようなことに興味を示そうとも、個人の自由＝個性の発揮として尊重されるべきものであって、その者の勝手であり、自分がその他者に共感したり反発したりすべき理由もない、つまりとくに仲良くしたり気を遣ったり、批判したりする必要もないということになる。子ども同士がお互いの生き方や価値観を尊重し合っているように見えても、実際には、相互不干渉の結果に過ぎず、無関心と紙一重であることも珍しくない。

仲間集団の中でしか承認を得にくい構造があるために、仲間からの排除は、自分の居場所を失うという大きな圧力として受け止められることになる。興味・関心が異なり、これまでお互いに距離を置いてきた別の仲間集団にはなかなか移れないし、また簡単には受け容れてもらえない。だから親や教師が思うほど「他にも友達はあるはず」とは受け止められない心理メカニズムが働くことになる。

第四に、仲間集団の相対的な拘束力が強いからと言って、仲間を構成する個人同士が決して

親密な関係で結ばれている訳ではないことである。仲間を大人の解釈による“親友”と読み替えてしまうのは早計であろう。仲間の凝集力をノリによると説明したが、ノリを共有できなくなったり、ノリを壊したりした者は、仲間から異分子として排除されることにもなるし、興味・関心の対象が相互に微妙にズレてくれば、仲間はたやすく解散してしまうのである。

剥き出しにされる不快感 “いじめ”を含めた子どもたちの問題行動を、子どもたちが置かれた社会環境に起因する「ゆとりのなさ」や「イライラ感」といったものに帰したり、「学校が楽しくない」「授業がつまらない」という声に対して、“分かる授業”を提唱することは、一定の説得力を持っているようにも思われる。しかし、それだけでは、到底すべてを語り尽くせそうにないのである。

子どもたちの声や様々な事例を通してうかがえるのは、子どもたちのうちのある者は、「退屈、窮屈、楽しくない、煩わしいなど自分にとって快適でない環境に置かれることを苦痛に感じている」ということであり、また、別の者は、「何が自己の欲求であるかを言語化することができず、他者に伝える術を喪失している」ということである。その結果、ある者は、拒絶感が先行して他者の話を聞くという意識（余裕）すら存在しなくなり、身体的な行動によって拒絶感を表明しようとする。またある者は、自己の欲求が満たされないまま自分の作った殻の中にこもってしまう。「ムカつく」「うざったい」「関係ない」という言葉が、そのような不快感やコミュニケーション放棄の端的な表現として、口を衝いて出る。

そしてまた、快適でない状況をもたらした者やそれを象徴する者に対して抱かれる不快感は、個人や小集団の枠を越えて、より大きな集団のなかに容易に広がっていく。

公平・平等性への執着 本報告書の97頁では、教師の叱責の程度が相手の生徒によって異なったことを原因とする次のような事例を取り上げている。

理科の実験中にG男が、誤って実験用の鉄粉をこぼしたので、教師のところに代わりをもらいに行った。教師は「実験のときは、注意しなければ危険だと言ったではないか」などと、あれこれ注意をして代わりの鉄粉を渡した。

その後、F男も、「鉄粉をこぼしてしまいました」と言って代わりをもらいに来た。教師は、単に「気をつけろよ」と言っただけで鉄粉を渡した。

それを見ていたG男のグループは、お互いに顔を近づけ、「あいつ、ひいきされているんだよな」とG男に言った。G男も「むかつくよ、まったく」と言って座った。

もし、この事例の教師が、F男とG男の性格や過去の失敗歴等を考慮したうえで、指導に違いをつけたとしたならば、G男たちはどのように反応するだろうか？おそらくは、この事例で示されたものと全く変わらないであろう。やはり「不公平」なのであり、叱責が軽く済んだF男は「ズルイ」のである。同じく96頁で取り上げているE子の事例のように、誰もが納得できる理由もなく、教師から特別に褒められる生徒は「ズルイ」のであり、母親の持つブランド物のバッグを自由に使える生徒もまた、場合によっては、「ズルイ」のである。「ズルイ」こともまた、十分に、“いじめ”の口実、“いじめ”を正当化する口実になるのである。

彼らには、集団内での平等の地位が脅かされることに対する反発と、その前段階における公平に扱われることへの執着がある。〈不公平〉であることは、平等の地位を危うくするおそれ

にもつながると感じているのであり、ほんの少しでも、自分が不利な（＝弱者の）立場に立たされたり、周囲からそのように見られることを嫌う。子どもによっては、そうしたきっかけを作った相手に対して〈攻撃性〉（17頁）を剥き出しにしさえする。そして、先のG男の事例のように、〈教師と子どもの関係も「平等」であることを重視し、友達的な教師を理想とする意識〉が子どもたちの間に共有されている場合には、教師が、ことさらに指示的になって、その子どもの集団内での地位を脅かす形になればなるほど、教師の言うことに対して、揚げ足を取ったり、陰に回って反抗の態度を示したりもするのである。

だからと言って、すべてが平等になることを望んでいるということではない。〈自分が優位にあること〉をむしろ当然のように考えていて、そのことを不平等であるとか、不公平であるとは意識しない者もいる。それは、自分が個性的であると周囲の者から評価され、承認を受けるためには、自分を他の者から積極的に差異化していかなければならないからでもある。

また、その一方で、「平等を侵され、不利益を被っている者は、それに反発すればよいのであり、それをしない者は自分の責任でそれを受け容れているのだ」として納得し、傍観を正当化する論理が生まれる。同時に、「自分の選択の結果として、不利益を被ったとしても、それはその者の自己責任である」と考えることになる。それゆえ、31頁で紹介したような「いじめられている者は、すぐに『やめろ』と言えばよい。やめろと言えば、大抵のいじめはなくなるはずだ」という（いじめられる側への）転嫁の言葉が生まれるのである。

このような心理や行動様式の土壌から、子どもたちの学級内の人間関係における様々な知恵や心理、駆け引きが生まれており、“いじめ”に対する態度もこれと無関係ではないのである。そればかりか、“いじめ”以外の援助交際や薬物使用など様々な問題行動もまた、同じ土壌から生まれていると考えてよいかもしれない。だから、私たちは、改めて、《児童・生徒理解》の大切さを強調しておきたい。そして、このことを今回の研究の結論とし、新たな研究への橋渡しとしたいと思う。

終わりに、2年間にわたって本研究にご協力をいただいた練馬区立光が丘むらさき幼稚園、豊島区立長崎小学校、清瀬市立清瀬小学校、北区立飛鳥中学校及び小金井市立小金井第一中学校の園児・児童・生徒、保護者、教職員の皆様と沢山の事例を提供して下さいましたその他数多くの学校の皆様に、改めてお礼を申し上げます。

東京都立教育研究所次長

久 保 大

指導資料

9 教研 - 2

「いじめ問題」研究報告書
いじめの心理と構造をふまえた解決の方策

平成10年（1998年）3月発行

編集・発行	東京都立教育研究所
所在地	東京都目黒区目黒1-1-14
電話	03-5434-1955